

可燃ごみ収集（一部地区）の民間委託への準備を進めております

なぜ民間委託をするの？

理由①

清掃センターで行っている直営業務（焼却業務・収集業務）について、平成13年度に策定された第3次総合計画（第4次行財政計画と関連）において行政運営の効率化、市民サービスの向上を図るため、行政責任の確保に十分留意しつつ、民間委託の活用を進める計画をしていました。
※業務員退職者不補充により、民間委託に向けた方針を取っております。

理由②

また、第5次行財政改革策定（平成24年度開始年度）において、静岡県内市町の状況等を勘案しながら、委託業務の比較検討をした結果、可燃ごみ収集部門が経費削減効果があるとして、民間委託する方針となり、平成23年度において収集地区の見直し、収集コースの決定等の準備行為を行っています。
※静岡県内23市12町の内、直営で可燃ごみを収集しているのは2市2町のみとなっております。



民間委託による効果は！

- ①ごみ収集経費の削減
 - ・現状経費との比較では年間約480万円の削減効果となります。
 - ②老朽化した収集車3台の購入費の削減
 - ・1台約840万円の車両購入費とその後の車両維持費が削減されます。
 - ③収集の効率化（収集開始時間と収集地区の見直し）
 - ・午前8時よりごみ収集を開始いたします。
 - カラス・猫による被害が軽減されます。
 - ④民間委託化に伴い、大型連休でも収集します
 - ・年始を除き、その他の祝日は全て収集します。
 - ⑤市民サービスに直結した環境保全対策の推進
 - ・不法投棄対策、国県市道沿いの散乱ごみの回収、リサイクル分別指導、清掃ボランティア活動の後処理支援、違反ごみ等への早期対応などを業務職員が実施します。
- ◎上記の方針は3月定例市議会で論議されます。

今後のお知らせについて

ごみ収集地区の曜日等変更は、回覧（随時）・市ホームページ・広報しもだ3月号・3月中旬の新聞折り込みでお知らせします。

何なの？ クロニシュタットって

クロニシュタット、聞きなれない名前ですね。これから下田の観光や歴史の中で度々出てくる名前です。ぜひ記憶にとどめておきましょう。
ロシアのサンクトペテルブルク市は皆さんご存知かと思えます。モスクワに次ぐロシア第2の都市。静かに佇む近世の古都は、動乱、革命、戦争、包囲と悲惨な歴史を秘め、ロシア革命により首都が再びモスクワに遷都とされるまで2世紀の間、帝政ロシアの首都として政治、経済、文化の中心でした。

この市は、18の行政区から成りクロニシュタットはその一つ。市の中心から北西に約32km、フィンランド湾に浮かぶコトリン島にあります。人口は約4万人。レニングラード海軍基地の本部があります。そこが下田と
どんな関係があるの？
今月号で北方領土について紹介していますが、当時、プチャーチン提督はクロニシュタットの港から出航しました。

小泉総理が来た時のこと
覚えてますか？
平成17年4月には政府主催で、「まどが浜海遊公園」芝生広場において、当時の小泉内閣総理大臣、町村外務大臣、ロシユコフ駐日ロシア大使等約400名の関係者を招いて、日露修好150周年記念式典が開催されました。ここには、日露修好150周年を記念してメモリアル記念碑が設置されています。驚くことに、これと同じ碑が、クロニシュタットにも設置されているのです。



このように下田とロシアは、プチャーチン提督がクロニシュタットを出港して以来、密接な関係・交流が続いてきました。
下田は、日米交流の原点のみならず、日露交流の原点でもあるのです。

埋もれ火を訪ねて

「武ヶ浜浪除」を築いた
今村伝四郎正長公



正長公は元和元年（1615）、徳川幕府にとって軍事的に重要な下田湊の警備を命じられ、後下田奉行となり、承応2年（1653）66歳、下田で没するまでの33年間下田を治めました。幕府の支配体制が整備され、世も泰平に向かうと、下田湊は畿内と江戸を結ぶ物資輸送の中間点・避難港として経済的役割も担うこととなりました。当初は須崎に遠見番所（御番所・海の関所）を設けましたが、寛永13年（1636）頃、船改番所として全ての廻船の検問を行うように大浦へ移しました。
当時の下田は風波が直接民家を襲う状態で、その対策として、また検問を受ける廻船への船用品などの積込や日待ちに対応できる湊や町にするため、武ヶ浜に長大な波除が築かれました。そして下田は「出船入り船三千艘」といわれる繁栄期を迎えました。また、了仙寺の創建や下田八幡神社の修復、朱印地の確保など民政にも力を注ぎました。
そのような偉業から正長公は今も「下田の基礎を築いた偉人」と讃えられています。
なお、江戸時代に下田は3回（元禄・宝永・安政の時代）大地震・津波に襲われ、いずれも全壊に近い状態でしたが、死者はそれぞれ27人、11人、99人（安政時代の下田の人口は3,851人）で、家屋等の大被害に比べ少ないと言えます。「その理由の一つとして、津波の襲撃を緩和し、直接町中への津波の進入を防ぐ力に多少とも与ったと推定されるのは、波除堤の存在である。」と「日本災害史」（吉川弘文館、北原糸子編、2011発行）は記しています。
（下田開国博物館館長尾形征己）

市役所が、いんげんは

安全な漁港を目指して

皆さんは下田市内に何か所の漁港があるかご存じですか？
市内には、白浜漁港、須崎漁港、外浦漁港、吉佐美漁港、田牛漁港の5か所があります。
現在、私の担当している水産基盤整備事業は、この内の白浜漁港と須崎漁港の2か所について、防波堤の整備やけい留施設を新たに設置することにより、港内の静穏度を向上させる仕事をしています。「静穏度を向上させる」とは、台風等の荒れた天候の際に、避難してきた漁船が安全にけい留できるように港内を穏やかな状態に保つことです。
その他にも、漁船が安全に航行できるように、港内にたまった土砂を定期的に撤去する「浚渫（しゅんせつ）」や、災害により破損した漁港施設の復旧等を行い、漁港の安全を維持していくために努力しています。
また、昨年3月11日発生の東日本大震災により様々な課題が見つかりました。想像を絶する津波の高さを目の当たりにし、現在想定されている津波の高さで果たしてよいのか？現在の防波堤の高さで耐え得るのか？
例えば、津波の高さを10mと想定した場合、海の近くに住んでいる方の安全を守るためには10m以上の防波堤が必要となります。
しかし、10mもの高さの防波堤を設置することで、海岸の景観が変わってしまいます。下田市のように自然、文化、歴史に恵まれ、多くの観光客が訪れるこの街に、このような高い防波堤が本当に必要なのでしょうか？
これらの課題については、市役所だけでは決めることはできません。今後、たくさんの方々のご意見をいただきながら、安全な漁港のあり方を第一に考えていきたいと思っております。



（産業振興課 土橋 一登）